

# チャンス・チャレンジ・チェンジ

秋田県立支援学校天王みどり学園 加賀谷 勝



## 相談・支援活動より

11月は各市町村で来年度の就学先を決定する教育支援委員会（就学指導委員会）や、中学校や高校では三者面談等が行われるため、保護者のみなさんが不安定になる時期だといわれています。今号では、二つの「保護者支援」の事例を紹介します。



### ○事例1

- ・不登校をきっかけに心理検査を実施し、その結果を保護者、学校関係者（コーディネーター、学年主任、担任、スクールカウンセラー）で共通理解を図った。発達水準は「平均の上」レベルであったが、相手の気持ちやその場の雰囲気を感じ取って行動することや物事を順序立てて行うことに課題があった。
- ・生活リズムを整えること、別室登校や遅刻・早退等が可能な態勢を作る、定期的に保護者と学校が面談を重ねるなど、家庭と学校の役割を明確にした。また、子ども自身が検査結果を気にしていたので、本人にも伝えて自己理解を促すことにした。
- ・両親に同席してもらい検査結果を説明したが、これまで子どもの心の中に押し込めていた感情が涙となって溢れ出した。改めて、本人の辛い気持ちを受け入れ、家族の絆を強めながら学校と二人三脚で取り組むことを確認した。



### ○事例2

- ・夏休み後に登校しぶりが始まり、約1カ月くらい学校を休んだ。その間、保護者は焦りや不安から、無理やり登校させようとし、強く叱って子どもを責めることが多かった。子どもは「自分なんかいない方がいい」というネガティブな発言を繰り返していた。
- ・保護者と学校（コーディネーター、担任）は定期的に面談を行った。家ではプリント1枚をやるなど、本人に選択肢を与えて本人が選ぶようにした。プリント1枚が2枚に増えたり、兄弟を通じて書いたプリントを学校に届けたりした。子どもが少しずつ落ち着きを取り戻した背景には、父親の変化が大きい。一緒にお風呂に入ったり、スポーツ少年団の練習を応援したりして子どもと過ごす時間を増やしたようだ。そして、学習発表会という大きな行事が終わった後に登校している。
- ・再登校してから2週間が経ったとき、子どもが体調不良を訴えた。保護者はまた不登校になるのでは思い、無理やり登校させた。「学校に行きなさい」と言う前に、「大丈夫か？」という一言と、本人の話をじっくり聴いてあげる大切さを伝えた。



二つの事例は不登校のケースです。子どもはストレスや不安を感じると、行動や身体で訴えます。この言葉にならない言葉を理解しようと心を傾けることで、辛い感情を言葉にできるようになり、身体症状が消失していく場合もあります。事例1の子どもは、「明日から学校に行く」と言うと、眠れなくなってしまうと話していました。事例2の子どもは、みんなが学校に行っている時間に外には出たくないと話していました。学校に行きたくても行けないという子どもの辛い気持ちを受け入れることが支援のスタートです。そして、子どもがありのままの気持ちを吐き出せる環境が必要です。ネガティブな感情を「吐」き出せば、マイナスがなくなり夢が「叶」います。不登校は子どもが過去の自分と闘い、今の自分を乗り越え、将来なりたい自分の夢を実現するための大切な時期です。子どもの良いところを伝え続けて、存在価値を高めましょう！